

2021

はじめよう、農福連携！



# Know 農福 Love

ノウ ノウフク ラブ



*Youtboku  
Achi*



AGRICULTURE × WELFARE

農福連携事例集・農作業マニュアル



# INDEX



はじめに ..... 1

農福連携とは ..... 2-3

取組事例1 -JAあいち中央- ..... 4-5

取組事例2 -JAひまわり- ..... 6-7

取組事例3 -JAあいち尾東- ..... 8-9

取組事例4 -社会福祉法人 無門福祉会- ..... 10-11

取組事例5 -社会福祉法人 福寿園- ..... 12-13

取組事例6  
-社会福祉法人 花と緑と健康のまちづくりフォーラム- ... 14-15

農福連携を実践してみよう ..... 16-17

作業マニュアル キャベツ ..... 18

作業マニュアル ブロッコリー ..... 19

作業マニュアル トマト ..... 20

作業マニュアル ミニトマト ..... 21

作業マニュアル キュウリ ..... 22

作業マニュアル バラ ..... 23

作業マニュアル カーネーション ..... 24

作業マニュアル 花苗 ..... 25

愛知県農業水産局農政部農業経営課

YouTubeチャンネルはこちら!

[https://www.youtube.com/channel/UCZu3e\\_5BAy-00NVPIhTJW3Q](https://www.youtube.com/channel/UCZu3e_5BAy-00NVPIhTJW3Q)

事例/マニュアル  
の動画をご覧  
いただけます



農業経営課ホームページ

<https://www.pref.aichi.jp/nogyo-keiei/>



## Know 農福 Love

**農業 と 福祉** お互いを知ること、農福連携の輪が広がります。

農福連携は、農業と福祉が連携して、農業分野での障害者の活躍を促すことで、農業経営の持続的な発展とともに障害者の社会参画を実現する取り組みです。

農福連携の取り組みは、高齢化や担い手不足といった問題を抱える本県の農業において、担い手の確保や地域農業の維持、さらには地域活性化にもつながります。また、障害者の就労や生きがいの場が創出され、生活の質や賃金水準の向上も目指せます。

農業と福祉の双方が抱える課題を解決し、お互いの利益を生む取り組みとして期待が寄せられ、本県でも農福連携のさまざまな試みが実を結びはじめています。

この冊子では、愛知県内の農福連携の優良事例を紹介するとともに、農福連携に取り組む際の農作業の手順をマニュアル化しました。皆さんが、農福連携に関心を抱き、取り組みをはじめるとなれば幸いです。

愛知県農業水産局農政部農業経営課



## 農福連携とは

農業分野では高齢化による担い手不足や耕作放棄地の拡大などの課題があり、福祉分野では、新たな就労先や生きがい等の場の拡大、工賃向上などが求められています。

そんな中、農業と福祉が連携することで、双方の課題解決と利益(メリット)がある「農福連携」の取り組みが広まりつつあります。

農業と福祉が分野を超えて連携し、人材の交流や知識の共有を行うことで、働く場所や人材の確保など多くの利点が生まれ、地域の活性化につながっていきます。



## 障害の種類と取り組みの形

### 障害の種類

障害の種類は、主に身体障害・知的障害・精神障害・発達障害・難病(特定疾患)などに分けられ、障害の種類によって力を発揮できる作業が大きく変わります。



#### 身体障害者

判断能力が高く、作業管理などが得意な人もいます。視聴覚・音声言語・肢体または内部障害など、障害の種類や程度によるが、圃場での作業が難しい人もいます。



#### 知的障害者

体力を必要とする作業を任せることができ、単純な作業でも集中力を持続できる人がいます。収穫時期や雑草の識別等の判断力を必要とする作業は苦手な人もいます。



#### 精神障害者

判断能力が高く、収穫や選別などを担うことができます。ただ、長時間にわたる作業や集中力を伴う作業は幻聴や幻覚などにより中断してしまう人もいます。



#### 発達障害者

点検、計量、細かい作業が得意な人もいます。自閉症や多動症、注意欠如症など種類によって得意不得意が幅広く変わります。

### 取り組みの形

愛知県で行われている農福連携の取り組みは、様々な形の取り組みがあり、大まかに5種類に分けられます。

#### CASE 1

#### 農業経営体が障害者を雇用

障害者本人と農業経営体が雇用契約を結ぶ形。既存の従業員のように雇用に関わる制度を適用させ、労働力として直接雇用します。障害特性による作業内容の選定や作業環境の調整など、障害者への対応についてある程度の知識や理解が必要です。

#### CASE 2

#### 農業経営体が福祉事業所に農作業を委託

農業経営体と福祉事業所が農作業の委託契約を結び、農作業を委託する形。農業経営体は、福祉事業所へ作業の対価である報酬を支払い、作業の実施は、福祉事業所の支援スタッフ(職業指導員)が引率し、委託された作業支援を行います。

#### CASE 3

#### 福祉事業所が農業参入

福祉事業所が、生産活動の一つとして農業を始める形。職員が農業の栽培基礎や農作業のノウハウを習得する他、地域の協力、外部指導者による栽培技術の習得が必要です。

#### CASE 4

#### 企業が障害者雇用と農業参入

企業が新しく事業部や特例子会社を設立し、障害者雇用の一環として農業を始める形です。近年では中小企業だけではなく大企業も増えてきており、企業内に農作業の知識がある職員がいなければ外部職員などによる指導を取り入れる必要があります。

#### CASE 5

#### NPO・団体等による農福連携の取り組み

NPOによる園芸福祉士の養成や派遣、園芸・農作業を活用した障害者等の健康回復・自立支援の取り組み、施設外就労による農作業請負のマッチングを支援する取り組みなど、多様な農福連携の取り組みがあります。

## 愛知県の農福連携推進の取り組みについて

愛知県では、2019年に「あいち農福連携推進協議会(事務局:農業水産局農政部農業経営課)」を設立し、農福連携セミナーやサポーター養成講座の開催、農福連携相談窓口の設置等の取り組みにより、農福連携の理解促進や取り組みの拡大を支援しています。

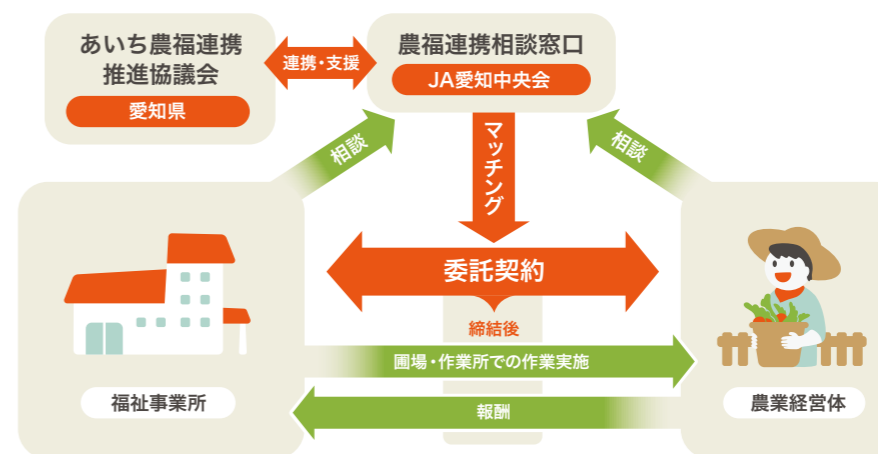


### 1 あいち農福連携推進協議会

あいち農福連携推進協議会は、愛知県農業水産局・福祉局・労働局、農業大学校、教育委員会、愛知労働局、JA愛知中央会、県セルフセンター、名古屋市、豊橋市、岡崎市、豊田市で構成し、連携して事業を推進しています。

### 2 農福連携相談窓口の設置及び農作業請負のマッチング

2019年に農福連携相談窓口(運営:JA愛知中央会)を設置しました。コーディネーターを配置し、農業経営体と福祉事業所等の農作業委託(施設外就労)のマッチングを進めています。



### 3 農福連携の理解促進と取り組みの拡大促進

#### 1 あいち農福連携セミナーの開催



農福連携の理解と関心を高めるため、農福連携の制度や県内の事例等についての講演を実施

#### 2 農福連携サポーター養成講座の開催



農福連携を実践する際に必要な農業と福祉の知識を身につけるための研修を実施

#### 3 特別支援学校における農業体験の実施



特別支援学校の生徒を対象に、農業基礎等の講義や簡単な農作業体験等を実施

#### 4 福祉事業所等の職員への農業技術習得研修の開催



園芸作物の栽培管理等の技術習得を目的に、農業大学校において圃場実習及び農業の基礎知識を学ぶ講義を実施

#### 5 農福連携マルシェの開催と福祉事業所へのアドバイザー支援

- ・農福連携に取り組み福祉事業所等が生産した農産物や加工品の即売会を実施
- ・福祉事業所等へ有機農業や6次産業化等のアドバイザーによる支援を実施

#### 6 その他

- ・農福連携現地見学会の開催
- ・特別支援学校の生徒による農業大学校の施設見学、簡単な農業体験(牛への餌やり)の実施



## 農家と福祉事業所の“代弁者”として双方に寄り添い、つなぐ

### 安城市 JAあいち中央 | 大橋農園 & 社会福祉法人 昭徳会

#### CASE 2

農業経営体が福祉事業所に農作業を委託



事例動画はこちら | <https://youtu.be/pe2l8c-pQJw>



Interviewee

杉山 久志さん | JAあいち中央 営農支援室室長

大橋 正樹さん | 大橋農園 代表  
杉浦 知里さん | 社会福祉法人 昭徳会 授産所高浜安立 就労支援員

JAあいち中央は、農家と福祉事業所、双方の思いに耳を傾けながら農福連携を支援しています。農家では人手不足の解消に繋がり、障害者も忍耐力や集中力がつき、心から農業を楽しんでいる様子。障害者から“未来の農家”が誕生するように…そう願うJAあいち中央は、安定的な収益確保に向けて、「6次産業化」にも力を入れています。

#### 地域から厚い信頼を寄せられる、農業のよろず相談窓口

「JAあいち中央 営農企画部 営農支援室」は、“農業のよろず相談窓口”として、働き手の紹介や農地の紹介、新規就農、耕作地の管理など農業に関するあらゆる相談に対応してきました。とりわけ力を注ぐ「無料職業紹介事業」は、人手不足に悩む農家と農業で働きたい人をつなぐ取り組みとして事業をスタート。具体的には、農家と求職者の間にJAが入り、事前の三者面談のなかで、労働条件や双方の要望を細かくヒアリングし、お互いが納得してから農家での雇用を開始するものです。農家と求職者の“代弁者”として双方に寄り添う姿勢が、高いマッチング率につながっており、この事業のノウハウが、農福連携のマッチング支援を行う第一歩になっています。

#### 福祉事業所からの相談、100件の農家へ呼びかけも、反応はゼロ

無料職業紹介事業に奔走していたある日、管内の福祉事業所から「障害のある子を受け入れてくれる農家さんはいませんか?」とJAに相談がありました。営農支援室の室長を務める杉山久志さんは、これまでに無い初めての相談に、「最初は戸惑った」と話します。

「ただ、施設職員の熱意に触れるなかで、農業のよろず相談窓口として『どうにか力になれないか』と思いました。無料職業紹介事業に登録している農家さんへ障害者さんの受け入れ(作業委託)を呼びかけたのが、農福連携の支援の始まりです」

現実は厳しく、100件の農家に呼びかけたものの、受け入れに応じたところはゼロ。聞いたことはあるが実際にできるのかよく分からない農福連携に対し、農家からは多くの不安の声があったと言います。

「障害者さんにどう作業が任せられるのか、通勤や賃金、作業中の怪我はどう対応すればいいのか。農家さんも分からないことが多いなかで、自分たちがサポートすべきことを考えるようになりました」

#### 農家と福祉事業所の間に入り、賃金や送迎、怪我などの相談に対応

杉山さんは、農家に直接出向き、障害者受け入れについて熱心な声かけを行ったことで、最終的に3件の農作業委託のマッチングが実現しました。その一例が、チンゲン菜を栽培する「大橋農園」と知的障害者の就労を支援する「社会福祉法人 昭徳会 授産所高浜安立」とのマッチングです。2019年9月から、大橋農園のハウスで、週2回、午前中にチンゲン菜の定植(植え付け)や収穫後の残渣(出荷できない作物やゴミ)の片付け作業を障害者が行っています。



農作業委託の開始にあたり、杉山さんは、福祉事業所職員とともに、実際のチンゲン菜ハウスに足を運んで農作業の内容や作業のやり方を確認し、障害者ができそうな作業方法を検討。この他、賃金やハウスまでの送迎、作業中の怪我の対応方法などの相談にのることで、農家と福祉事業所の不安を取り除き、お互いが納得して委託契約できるように気を配っています。

作業の開始にあたり、最初の1か月間を研修期間と位置づけ、実際の作業が問題なく行えるかどうかを確認しました。大橋農園代表の大橋正樹さんは、研修期間があったことで、安心して農福連携を始められたと話します。

「最初はマルチ(作物の株元を覆うフィルム)の上を踏み歩いてしまわないか、作物を草と間違えないかなど不安でしたが、全くそんな心配はいりませんでしたね。むしろ、作業が想像以上に丁寧で、これなら安心して任せられるなと思いました」

障害者への作業の指導は、福祉事業所職員が付き添ってサポートを行うため、障害者とのコミュニケーションに関しても困ったことはないのだとか。授産所高浜安立の就労支援員 杉浦知里さんは、指導する際の工夫を次のように明かします。

「大橋さんが教えてくださったことを、噛み砕いて説明しています。」

利用者さん(障害者)は発達障害の方もおり、言葉だけでなく理解しづらいため、作業手順やポイントをイラスト化したマニュアルを作成し、手本を見せながら教えています」



#### 心から農業を楽しむ障害者、安定的な人材確保から事業に専念へ

最初は慣れない様子の障害者も、農作業をするうちに、みるみる顔つきが明るくなっていきます。杉浦さんは、その変化を人一倍感じていました。

「最初は、弱音ばかり吐いていましたが、回数をこなすうちに忍耐力や集中力がついていきました。保護者からも、利用者さんが農作業をすることを本当に楽しみにしていると聞きます」

実際、障害者のなかには、病院へ行くために農作業を休んだ日、保護者に「農業がしたい」と強く訴えたことがあったそうです。何より、障害者の頑張りは、大橋農園の安定的な人材の確保につながっています。

「以前は、突然だれかが都合が悪くなって辞めてしまうと、求人募集するのが大変でした。また、やっと採用できても作業に慣れるまでは2~3か月はかかり、慣れてきた段階で『合わない』と辞めていく可能性もありました。しかし作業委託を始めてから継続的に仕事を任せることができており、求人の負担が軽減されて、大変助かっています」  
農業により専念できるようになった大橋さん。事業をどう成長させていくかを考える余裕も生まれてきました。

#### 障害者から農家が誕生してほしい、夢を叶える鍵は「6次産業化」



大橋農園は新たな挑戦として、JAあいち中央の協力のもと、農福連携で生産したチンゲン菜を原料にした「グリーンマドレーヌ」を開発。JAが主催するイベントで配布したところ、評判は上々だったそう。杉山さんいわく、この取り組みの目的は、「6次産業化による農家と福祉事業所の安定的な収益源の確保である」のだとか。

「大橋農園さんのもとで働く障害者さんの一人が、『将来、正社員としてここで働きたい』と話したそうです。ただ、現状は農産物の単価の低さから農家が安定的な収益を得られにくく、社員として人を雇うことが難しい状況です。将来的に、彼らと生産したチンゲン菜を、福祉事業所で加工して販売する流れができれば、双方の安定的な収益につながり、社員として雇うことも夢じゃありません」

現状は農福連携に踏み切れない農家も多く、福祉事業所からの需要(農作業の希望)に対し、受け入れる農家の数が追いついていません。要因の一つは、農福連携の取り組みや、JAあいち中央によるサポートの内容を知らないこと。杉山さんは「少しでも興味があれば、JAにまず相談してください」と呼びかけます。

「JAが双方の間に入って最大限サポートしますので、まずは気軽に相談してほしいです。農作業の体験会を実施させていただければ、想像以上にすんなりと連携できると思います」

#### JAあいち中央の取り組み



#### JAあいち中央 営農支援室 (安城市)

<https://www.jaac.or.jp/agriculture/einoshien/index.html>

主な生産品目	米、きゅうり、たまねぎ、ニンジン、イチジク、チンゲン菜等
農福連携をはじめた年	2017年12月
その他の農福連携の取り組み	耕作放棄地の解消、施設・農機のお見合い、JAまっりの参加、加工品の提案
所在地	安城市赤松町浄善50

#### 大橋農園(代表 大橋正樹氏) (安城市)

生産品目	チンゲン菜
栽培面積	1ha(植え付け面積は90a)
雇用者数	専従者3人、パート従業員8人
農福連携をはじめた年	2019年
受け入れ人数	週2回、1回4~5人
依頼作業	チンゲン菜の苗の植え付け作業、残渣の片付け

#### 社会福祉法人 昭徳会 授産所高浜安立 (高浜市)

<http://www.syoutokukai.or.jp/jusan/>

展開事業	生活介護事業、就労継続支援B型事業、就労移行支援事業
活動内容	菓子製造、自動車部品下請け作業、農作業、リサイクル作業等
どう障者の人が多いか	発達障害をとまなう知的障害



## スプレーマムから芽吹く農福連携が地域を彩る

豊川市 JAひまわり | スプレーマム生産農家 & NPO法人 パルク

Interview Vol.2

### CASE 2

農業経営体が  
福祉事業所に  
農作業を委託



事例動画はこちら | <https://youtu.be/p678ZzhITvs>



#### Interviewee

岩城 圭汰さん  
JAひまわり 営農部 花き課  
大村 美香さん  
JAひまわり 営農部 営農企画課

山田 裕也さん  
スプレーマム生産農家  
伊藤 淳樹さん  
NPO法人パルク サービス管理責任者

施設園芸が盛んな愛知県は、1962年以降、花きの産出額において全国1位をキープ。その一翼を担うのは、県内でも有数の「スプレーマム」の産地を管轄するJAひまわりです。JAひまわりは、スプレーマム部会の取り組みを起点に農福連携を推進し、地域農業を盛り上げようとしています。

### 農家が抱える長年の問題、 人手不足の解消へ

2020年1月、JAひまわりは農業の人手不足を解消するため、スプレーマム部会へ「農福連携」の取り組みを呼びかけました。部会の運営に携わる営農部・花き課の岩城圭汰さんいわく、「呼びかけた当初は、農家さんも農福連携に馴染みがなく、できるかどうか不安がっていましたが、人手不足を解消するためにも、やれることから始めてみようとなりました」このため、JAひまわりは、地域の福祉事業所に声をかけ、JAひまわりが管理する「菊育苗センター」で障害者の受け入れを開始、比較的単純な作業である挿し芽作業を任せることにしました。そこで問題なく作業ができたことから、スプレーマム部会内で農福連携への理解が進み、取り組む農家が増えていきました。



集中してやってくれるので頼りにしています」と山田さんは話します。

山田さんが農福連携に関心を持ち始めたのは、自閉症の子どもを持つ親御さんとの出会いがきっかけでした。「そのお子さんは農福連携に取り組む農家さんのもとで働いていました。親御さんが『子どもが社会に貢献できることが、本当に嬉しい』と話していたのが印象に残っていて、自分も農家として役に立てれば、と取り組みを決めました」

当初は不安もあった山田さんですが、取り組みを進めるうちに、障害者への信頼は自然と厚くなっていったそうです。

「一緒に働くパートさんが障害者さんを気にかけてくれるので、私が不在でも問題なく、安心してお仕事を任せられています。障害者さんのおかげで職場の雰囲気も明るくなりましたね」と山田さんは話します。

障害者に任せる仕事を検討することが、農作業を細分化・単純化するきっかけになり、作業のマニュアルづくりに活かすことができると感じています。



体制面の整備をしたJAひまわり営農部営農企画課の大村美香さんは次のように説明しました。

「山田さんと福祉事業所との間に入り、作業内容から賃金、保険などの相談に乗っています。現在、農福連携に取り組む農家さんは6戸、福祉事業所さんは4事業所です。連携先のマッチングだけでなく、作業日の調整もしています」

### 「だれかの役に立っている」ことが 障害者の“自信”に

福祉事業所も、農福連携のメリットを実感しています。主に知的障害者の就労支援を行うNPO法人パルクは、JAひまわりの「菊育苗センター」で、農家から委託された挿し芽作業などを手伝っています。パルクは以前から農福連携の取り組みを進めており、サービス管理責任者の伊藤淳樹さんはこう明かします。

「パルクは『障害のある人が地域で活躍しながら暮らせるように』という思いから立ち上がりました。豊川市のある東三河地域は農業が盛んな地域です。利用者さん(障害者)が楽しく、地元で活躍しながら働くために、農福連携は大きな一歩になると感じました」

実際、福祉事業所の外に出て農作業に取り組む障害者は、地域の人と関わることで、自信を持ち始めているようです。

「農作業を終えた利用者さんが施設に帰ってくると、『すごく頑張ったよ』と話してくれるんです。『よかったね、頑張ったね』と褒めると、彼らはたちまち笑顔になる。施設の外でも活躍し、『だれかの役に立っている』と実感することは利用者さんの自信につながります。活躍の場を提供して下さる農家さんがいること、利用者さんの頑張りが地域に広がっていくことが本当に嬉しいですね」



以前はパルク単独で農福連携に取り組んでいたこともあり、伊藤さんはJAひまわりによるサポートの心強さも実感しています。

「利用者さんが取り組みやすい仕事を、JAひまわりさんのもとで一括して受けられるのはありがたいですね。一人の農家さんのところだと、わずかな仕事にしかならないので、JAひまわりさんが農家さんとの間に入って下さることで、利用者さんが活躍できる作業の幅も量も増えているように感じます」

双方の橋渡し役を担っている大村さんは、「農家さんや福祉事業所さんから『ありがとう』と声をかけてもらう機会が増え、それぞれがWin-Winの関係を築くことに貢献できているのが嬉しい」と笑みをこぼしました。

### 農作業の単純化・細分化を進め、 農福連携の輪を広げていく

農福連携を進めるうちに、課題も見えてきました。

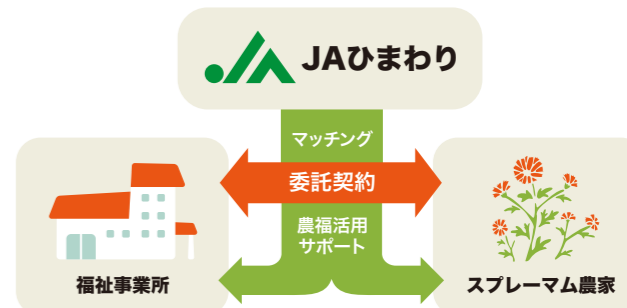
山田さんは、障害者へもっと他の作業も委託したいと考えており、「挿し芽作業だけでなく、苗の植え付けや収穫、箱詰めなど、障害者さんに手伝っていただける作業はほかにもあるはず。それを検討するためにも、農作業の単純化・細分化をし、作業マニュアルづくりをJAひまわりさんと進めていきたい」と語ります。

JAひまわりの岩城さんも「単純そうに見える作業でも、繊細な動きや判断が必要な場合がありますし、教え方が、感覚的になってしまう部分が多いため、作業のコツを具体的に伝える工夫が必要」と考えており、農家とともに課題の解決に取り組むことに意欲を示しています。

今後、JAひまわりは、他の部会にも農福連携を呼びかけていく予定です。地域に芽吹いた農福連携の種は、着実に豊川の街を彩り始めていました。



#### JAひまわりの取り組み



#### JAひまわり 営農企画課 豊川市 <https://ja-himawari.com/rinen/agri-job/>

主な生産品目	大葉、トマト、イチゴ、バラ、スプレーマム
農福連携をはじめた年	2020年1月
その他の農福連携の取り組み	JA育苗センターでの作業委託
所在地	豊川市三谷原町北浦68-1

#### スプレーマム生産農家(山田裕也氏) 豊川市

生産品目	スプレーマム
栽培面積	ハウス2,000坪
雇用者数	パート従業員10名
農福連携をはじめた年	2020年
受け入れ人数	月2回、1回3~4名、月延べ8名程度
依頼作業	スプレーマムの挿し芽作業

#### NPO法人パルク『エコハウス』 豊川市 <http://park.kagishippo.com/>

展開事業	就労継続支援B型事業
活動内容	自主製品(農作物)づくり、農作業の委託作業、野菜のパック詰め、工業製品の内職等
どういった障害の人が多いか	知的障害



袋詰め作業から広がる豊かな輪

豊明市 JAあいち尾東 | 豊明福祉会

Interview Vol.3

**CASE 2**

農業経営体が福祉事業所に農作業を委託



事例動画はこちら | <https://youtu.be/B4NZhPnSOqE>



Interviewee

青木 崇史さん | JAあいち尾東

佐藤 剛さん | 社会福祉法人 豊明福祉会 あびつと 管理者/サービス管理責任者  
久野 達也さん | 社会福祉法人 豊明福祉会 メイツ サービス管理責任者

地域を盛り上げるため、豊明市役所と一緒に新しい特産品づくりに挑戦してきたJAあいち尾東 社会福祉法人豊明福祉会との出会いから農福連携の輪が広がります。

市・JA・福祉会の連携 キーワードは「特産品」

JAあいち尾東は、尾張地区の東にある瀬戸市・尾張旭市・豊明市・日進市・長久手市・東郷町を管内とする農業協同組合です。特に豊明市は鉢物取引額日本一の“花き市場”があり、花にゆかりがあるまちです。花束のような野菜であるカリフラワーはまちのイメージにぴったりということで、2015年からJAと市は協力してブランド化に取り組み始めました。

現在、カリフラワーは、7戸の農家が生産しています。当初は袋詰めの出荷調整作業を農家自身で行っていましたが、次第に人気が出て生産量が増えたため、袋詰め作業に手が回らなくなりました。生産を拡大しつつ、農家の負担を軽減できないか。JAあいち尾東の青木崇史さんが考えた末にたどりついたのが農福連携でした。青木さんが豊明市に相談すると、知的障害者の福祉に取り組む「豊明福祉会」を紹介されました。

豊明福祉会は、福祉事業所のお菓子工房でエディブルフラワー（食用花）を利用した焼き菓子を製造するなど、以前から豊明市と連携して農福連携に取り組んでいました。カリフラワー農家が人手不足で困っているという状況を知り、地域貢献になると考え取り組みを始めました。



JA担当者も農家も驚く障害者の仕事ぶり

豊明市沓掛町にあるJAあいち尾東の南部営農センター内では、黙々と作業する障害者たちの姿がありました。豊明福祉会の就労支援事業所「あびつと」の利用者です。収穫されたカリフラワーがセンターに運び込まれると、障害者はカリフラワーの株を大・中・小の大きさごとに分類します。そして塊になっている花蕾（からい）を包丁で綺麗にカット。はかりで計量したら、花束のように美しく見えるように袋詰めをし、最後にテープで留めて出荷箱へ入れます。



「知的障害のある方が多いので、指示は言葉ではなく“見える化”を心がけています」と、あびつとの責任者 佐藤剛さんが指導の工夫を教えてくださいました。工業製品と違い均一ではない農作物の仕分け基準は、口頭で伝えることが難しいため、壁のよく見える位置に花蕾をカットする大きさの基準が分かる写真を掲示したり、重さの基準は、はかりの目盛に色を付けて、数値ではなく色で分かりやすくしたりするなどの工夫をしています。

「環境を整えれば障害者さんは的確に作業をしてくれます。想像以上の仕事ぶりに驚きました」と青木さんは話します。「自分たちの育てた

野菜がどう扱われるのだろうと心配する農家さんもありましたが、障害者さんの働く姿と綺麗な出来上がりに、今では『安心して任せられる』、と嬉しそうだと笑顔を見せます。

2018年から袋詰めを委託したことで農家は栽培に集中できるようになりました。カリフラワーの出荷量は年々安定して増え、市民の食卓に並ぶほか、保育園や学校の食育活動、豊明市が行う花マルシェなどのイベントにも登場するなど、特産品として育ちつつあります。農家の顔が次第にはつらつとしていくのを見た青木さんは、「大変な農業」が「楽しい農業」になったのだと感じ、農福連携に取り組んでよかったと心から思ったそうです。

多様な農福連携事業の実現へ

青木さんは豊明福祉会の生活介護事業所「メイツ」へも、事業を提案することにしました。メイツでは「はたらく喜び・すこす楽しみ・つなげる輪」をコンセプトに、障害者に様々な活動の場所を提供しています。メイツの利用者は比較的体を動かすことが得意なので、青木さんは「野菜栽培への挑戦」を持ちかけました。

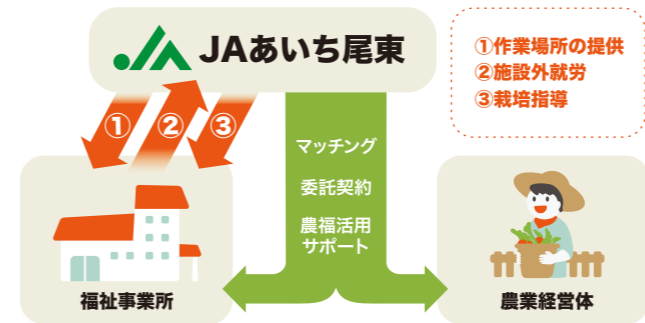
「室内での作業に向いていなかった人達が、農作業を始めたことでおのびと作業を楽しむようになりました」

そう語るのはメイツのサービス管理責任者・久野さん。2019年から事業所に隣接する畑で、障害者たちと野菜を育て始めました。畑はもともと耕作放棄地。所有者がメイツの挑戦を知り、無償で貸してくれたそうです。カリフラワーの袋詰めと同様、“見える化”を意識した指導により、障害者たちは様々な品目の農作業に取り組んでいます。

「農業について僕は知らないことばかり。栽培の基本は青木さんから教わっていますが、市内の農家さんとも相談し合い、交流し続けていけたらと思います」と、久野さんは意気込みます。



JAあいち尾東の取り組み



葉物野菜は、雑草と間違えたり収穫の判断が難しかったりしますが、トマトのように実がなるものは得意……など、障害者が育てやすい野菜をまだ探している途中。うまくいかないこともあります。全身で楽しさをあらわす障害者たちとともに、土に触れ野菜を育てる喜びを、久野さんも味わっています。



農福連携で育まれる地域の魅力

障害者は、健常者から偏見や先入観を持たれやすい傾向にありますが、地域で働く彼らの姿が日常となれば、助け合いの輪が広がります。豊明福祉会は、“障害者が住み慣れた地域で豊かに暮らすこと”を理念とし、農業を通じて障害者が地域で活躍していくことを目指しています。今後、『カリフラワー以外の品目でも困っている農家の農作業の請負』『生産している野菜の品質が向上できれば、豊明福祉会の施設や豊明市役所の食堂だけでなく、地域住民向けにも販売』『市内の工場と連携して野菜を粉末化、焼き菓子にしてマルシェで販売』といった構想を描いています。

青木さんは、人手不足・耕作放棄地など農家の問題解決だけでなく、特産品の生産を伸ばすことで地域の活性化につながるのではと期待を寄せています。カリフラワーの出荷調整から始まった農福連携の取り組みは、今後も市・JA・農家・福祉事業所の人々を結びつけながら広がっていきます。

JAあいち尾東 営農企画課 <https://www.jaab.or.jp/>

主な生産品目	白菜・ブチヴェール・カリフラワー・イチジク・イチゴ等
農福連携をはじめた年	2018年
その他の農福連携の取り組み	JAあいち尾東の瀬戸地域山口加工所にて米粉の袋詰め、加工品(ドライフルーツ)用の原料のカット、袋詰め等
所在地	日進市蟹甲町地下213-1

社会福祉法人 豊明福祉会 <https://toyofuku.info/>

事業所	あびつと	メイツ
展開事業	就労継続支援B型事業、就労移行支援事業	生活介護事業、日中一時支援事業、レスパイト事業
活動内容	プラスチック製品、金属部品の組立、自動販売機の管理・補填・集計、野菜の出荷準備、食堂の運営等	お菓子の製造、農作物栽培、軽作業、清掃業務、緩衝材製造、喫茶店営業等
どういった障害の人が多いか	知的、精神、発達、身体	知的、発達



## 農福連携をきっかけに広がる地域交流

### 豊田市 社会福祉法人 無門福祉会

#### CASE3 福祉事業所が 農業参入



事例動画はこちら | <https://youtu.be/4RW8uYYxVZE>



#### Interviewee

磯部 竜太さん

社会福祉法人 無門福祉会  
事務局長

吉田 晶さん

社会福祉法人 無門福祉会 むもんカンパニー青い空  
生活支援員

自社農園での失敗体験から自然栽培<sup>(※)</sup>への挑戦を機に、休耕地の借り入れや、地元農家との連携など、本格的に農福連携の道を歩み始めた無門福祉会。一人ひとりに合った農業の実現は、利用者と福祉事業所職員の関係性に变化をもたらしたほか、地域交流の活性化にも寄与しています。

※自然栽培:肥料・農薬をつかわず植物と土本来の力を引き出す農法

#### 知的障害のある利用者約100名が、 事業所内外で農業に携わる

あらゆる「門」を開放し、どんな人でも利用しやすく、地域との結びつきを大切にしたい運営を目指す「社会福祉法人 無門福祉会」。だれもが“その人らしさ”を尊重され、幸せに暮らせるような社会の実現に向けて、就労継続支援B型事業所「むもんカンパニー」など6つの福祉サービス事業所を運営しています。うち3つの事業所から、知的障害者を中心とした障害者の約100名が、借入農地を活用して野菜や米の生産、加工、販売までを通年で実施。地元の農家と独自に契約を結び、農業分野における施設外就労にも力を注ぐなど、事業所内外問わず農福連携に取り組んでいます。



#### 一度は諦めかけた農業、 自然栽培の可能性を信じて再挑戦

無門福祉会が農業を始めたのは、事業所を開いた1988年。障害者の園芸療法として、事業所が所有する小さな畑で野菜を育てていたものの、「だれのためにもなっていなかった」と、事務局長の磯部竜太さんは振り返ります。

「当時は家庭菜園レベルで規模も小さく、利用者さん(障害者)にお任せする仕事は、石拾いのように単純かつ画一的な作業のみ。利用者さんのモチベーションも上がらず、福祉事業所職員も含めてだれもが楽しめずにいました。作った野菜を販売しても、思うように売上は伸びず。もう農業は辞めようと思っていたんです」

諦めかけたとき、無門福祉会に訪れた一つの縁。障害者にあった仕事づくりとして、手間はかかるが付加価値の高い作物をつくる「自然栽培」に取り組む愛媛県の就労継続支援B型事業所に出会います。障害者が田んぼや畑に出て、楽しく働く。その姿がさまざまな人の目にふれ、ときに声をかけあい、手を差し伸べあい、地域のつながりが生まれる。**障害者が「地域につながる」ことが、「地域をつなげる」ことになる**——その可能性を信じた磯部さんは、「自然栽培なら、地域みんなが本来の農業の楽しさを体験できるかもしれない」とギアを入れ替えます。2015年には地元の休耕地を借り入れ、本格的に自然栽培をスタート。地元でイチゴの自然栽培に取り組む「みどりの里」とも連携し、施設外就労での農福連携にも挑戦しました。

無門福祉会より障害者の受け入れを行う「みどりの里」野中慎吾さん。



#### 一人ひとりが楽しめる農業が、 障害者との関係性を変えた

この日、取材で訪れた耕作地では、太陽の光を浴びながら懸命に働く障害者の姿が見えました。立派に育ったにんじんを収穫したり、収穫したものを運んだり、その動きぶりを見れば、あたかも最初から順調だったように思えます。しかし、以前は障害者の集中力がすぐに切れたり、まったく興味を示さない人も少なくなかったそう。そこで、生活支援員の吉田晶さんは、ある工夫に乗り出します。

「一連の農作業を細分化し、利用者さん(障害者)一人ひとりの得意、不得意に合った作業を割り当てたんです。作業がハマると、昼食の時間になっても続けるほど没頭していますね。ハマるものを見つけるまでは時間もかかりますが、得意なものが見つれば、みんなが楽しく作業できます。障害の有無に関わらず、自分の好きなことを仕事にできるのは、やっぱり幸せなんですよ」



一人ひとりに合った仕事の分担から、“その人らしさ”が輝き出したとき、福祉事業所職員と障害者の関係性は大きく変わり始めました。目の前で生き生きと農業に励む障害者を見つめ、吉田さんは穏やかに言葉を紡ぎます。

「利用者さんに何かを『教える』という感覚に違和感を覚えるようになりましたね。福祉事業所職員も農業は素人なので、教える・教えられるの関係性が生まれにくい。農業を始めてから、障害者と職員の上下関係が無いフラットな関係で仕事ができるようになりました。利用者さんのほうが得意な作業もあるので、こちらが頼ることも多々あります。なので、「明日休みます」と伝えられると本当に落ち込むんですよ。『その人の代わりはいない』のだと、改めて実感しています」

本格的に農業を始めたあの日から、障害者の新たな一面を知る機会が増えて嬉しいと、吉田さんはこやかに語りました。



#### 農福連携をきっかけに広がる地域交流

農業をすることで、地域との交流がぐっと広がりました。自然栽培に取り組む全国の福祉事業所同士でつながり、お互いの耕作地を見学し、野菜を売り買いすることもあれば、地元の小学校で田植えや稲刈りを教えることも。毎週土曜日は、地元企業から約20名がボランティアで農作業に参加。磯部さんいわく、**農福連携をきっかけに地域の人たちと同じ目線で関われる“フラットな関係性”を築けているのだとか。**

「最初は、企業の方も利用者さん(障害者)とどう接すればいいのか迷っていたようですが、どんどん打ち解けていきましたね。『ちゃんとやらなあかんがね〜』『お〜〇〇くん、この間はテレビに映ったね』と笑いながら会話して、今では本当に家族のような雰囲気です」

#### みんなでやる農業から、 地域の明るい未来を育む

地域に根ざした農業に取り組むなかで、あらゆる人の「門」が開かれていく。農福連携の確かな手応えを感じている無門福祉会は、どのような未来を描いているのでしょうか?障害者の頑張りを近くで見ている吉田さんは、「みんなの活躍を保護者さんや地域のひとにもっと知ってほしい」と意気込みます。

「保護者さんのなかには、自分の子どもが障害を持っていることや、社会貢献できていないことに引け目を感じている方もいます。そんな方にこそ、利用者さんのこの姿を見てほしい。こんなにも汗水垂らして頑張っている、地域に貢献しているんだよと伝えたいです」



広大な耕作地で伸びのびと働く障害者を、まっすぐに見つめる磯部さん。その目に映るのは、地域の明るい未来です。

「みんなでワイワイ作業していると、近所の地主さんが『何やっတာだ?』と興味を持って様子を見にきてくれます。これだけ頑張っているならと、お茶を出したり、手伝ったりしてくれる人も。農福連携をきっかけに、みんなでやる農業が広がり、地域の交流が盛んになると嬉しいです」

社会福祉法人 無門福祉会 <sup>豊田市</sup> <https://www.mumon-fukushi.net/>

事業所	①障がい者支援施設むもん ②むもんカンパニー青い空 ③むもんカンパニー (3事業所)
展開事業	①生活介護 ②生活介護、就労継続支援B型 ③就労継続支援B型
活動内容	自然栽培農業(米、にんじん、イチゴなどの栽培)、椎茸栽培、養鶏(施設外)、加工、販売、軽作業、菓子製造、清掃業務、紅茶店等
どういった障害の人が多いか	知的障害



未経験ながら農業と障害者の就労支援に新規参入

## 田原市 社会福祉法人 福寿園

CASE3  
福祉事業所が  
農業参入



事例動画はこちら | <https://youtu.be/AkeLRnZTnd0>



Interviewee

小久保 和也さん 就労継続支援センター あい福の里  
管理者兼サービス管理責任者



県内に特別養護老人ホームなど19施設・91事業所を運営する「社会福祉法人福寿園」  
田原市保美町にある就労継続支援センター「あい福の里」で、市内初の「就労継続支援A型事業所」として障害者を“雇用”しながら  
農福連携の取り組みを進めています。

### 農業王国・田原市で取り組む農福連携

愛知県の最南端・渥美半島にある田原市は“全国1位”の農業産出額を誇ります。田原市では、長年、就労継続支援A型事業所(※)がなかったことから、田原市役所や福祉関係者から設置の要望があがっていました。福寿園は老人ホームや在宅サービスなど、高齢者介護を専門にしていますが、中長期計画で「地域共生社会を目指して障害者事業に積極的に取り組む」という方針を掲げており、2017年に就労継続支援A型事業所「あい福の里」を開設しました。

あい福の里では、開設時から障害者が露地野菜や椎茸の栽培、加工などを行っています。生産した農産物は、福寿園が運営する高齢者施設等へ小売価格で販売し、高齢者へ提供する給食(1日約3,000食)などに使われていて、障害者の賃金確保ができています。

(※)就労継続支援A型事業所とは、一般的な就労が難しい障害者に働く機会を提供する福祉事業所のこと。障害者と施設が「雇用契約」を結び、障害者は一定の給料をもらいながら働くことができます。雇用契約を結ばない場合は「就労継続支援B型事業所」と分類されます。

### 高齢者介護“一筋”の組織が 事業に取り組めるわけ



自然を相手に体を動かして行う農業は、雨や夏の暑さ、冬の寒さなど過酷な面もあります。しかし、「自然を感じながらの農作業で体力のついた方、引きこもりや生活保護から脱却できた方もみえます。自然の力の凄さを感じています」と話すのは、あい福の里の管理者である小久保さん。事業所の開設時から障害者と共に農業に取り組んできました。

青空の下、畑で育った作物の収穫にいそむ障害者たちを見守り、テキパキと指示を出している小久保さんですが、開設時は初めての「障害福祉」と農業に大きな不安を抱えていました。障害のある人へどう接したらいいのか、畑は何から始めたらいいのか……。小久保さんは戸惑いながらも、取り組みを始めました。



障害福祉については、田原市からの支援がありました。

「普段から田原市の障害者総合支援センターや障害者福祉課とやり取りをしており、困ったらすぐに相談できるネットワークがありました。また、必要に応じて就労支援専門員が現場に入って、職員の悩みに寄り添ってくれます。そうした全面的なバックアップのおかげで、知識や経験がゼロからの取り組みでしたが、しっかりと事業を進められていると感じます」

農業で分からないことはネットや書籍で調べるほか、苗を仕入れている地元の種類業者や農家に尋ねたりしています。農福連携の取り組みを始めてからは、福寿園としても今までにはなかった「地元とのつながり」が得られ、手応えを感じるようになりました。

農福連携の取り組みを始める際には、知識や経験不足を補うために、必要に応じて農業と福祉の専門家に質問できる「つながり」を持っておくことが大切と小久保さんは実感しています。

### 障害者の働きやすさが第一

あい福の里は施設の近くに露地栽培の畑と、椎茸ハウスのある畑を持っています。農業が盛んな田原市ですが、椎茸栽培をしているのは実はここだけです。収穫した椎茸は、あい福の里の建物内にある作業場に運ばれ、障害者が仕分けやカットなどの出荷前の工程をすべて行います。

「椎茸は育てるのに体力面の負担が少なく、障害者が作業をするのに向いています」

椎茸栽培は、ハウス施設の中で栽培しているため、天候の影響を受けずに計画的に作業ができます。一度設備を作ってしまうと通年で安定した収益が見込める上、菌床の管理・収穫・包装など複数の作業があるので、障害者それぞれの得意なことに合わせて仕事を割振ることができます。そのため、椎茸栽培に取り組む福祉事業所は全国各地に存在します。あい福の里では、岐阜県にある「社会福祉法人恵那たんぼ」から菌床を仕入れ、栽培の指導も受けています。



小久保さんが農福連携で大変だと感じるのは、夏の暑さや冬の寒さなどによる「体への負担」だそうです。露地野菜の栽培を始めたばかりの頃は、障害者が仕事に熱中しすぎて体調を崩すことがありました。

事業所開設時の4人の障害者は、人より疲れやすいなど体力面で不安があったうえに、自身の体の不調を上手く伝えることができませんでした。

そのため、小久保さんは障害者の体調管理に最も注意を払うようになりました。体力のない人は、椎茸栽培を優先的に担当してもらい、屋外の作業ではこまめに休憩や水分補給の指示を出すなど、配慮を欠かさないようにしています。



### 農福連携に さらなる可能性を見る

2021年現在、施設で農業をするのは20代～60代の19人。初めは誰もが不安そうでした。小久保さんは彼らが仕事に早く慣れるよう、作業を分解して割り当て、成果を確認します。手間はかかりますがその工夫により、障害者が自分の役割を理解し、効率的に仕事をこなせるようになります。さらに頼りになるのが開設時から働く4人を中心とした「先輩」の存在です。互いに声をかけあい、楽しそうに作業をする彼らの姿を見て、新人の不安や緊張がほぐれていきます。

「利用者さん(障害者)がたくましく元気になっていく姿は頼もしいです」

やりがいは、手塩にかけた作物が育つ喜びと障害者の成長を感じられること。引っ込み思案だった人がいつの間にか率先して作業をしている。寡黙だった人が休日に他の利用者を誘って遊びに出かけるようになっていく。そんな変化を目の当たりにして、小久保さんは、農業は人の心を開放的にすると実感しています。

「地域のつながりを強めるためにプロ農家から指導を受けることや、地域の農家へ出向いて収穫などの作業請負を行うことを検討している」と生き生きとした表情で事業の展望を語ってくれました。



社会福祉法人 福寿園 田原市  
<https://www.fukujuen-recruit.jp/sp/facilities/higashimikawa.html#sec07>

展開事業	就労継続支援A型事業
活動内容	農作業、椎茸や野菜の乾物製造、漬物製造、業務委託にて施設等の環境整備
どういった障害の人が多いか	統合失調症等の精神障害





五感で楽しめる“園芸”から花開く 障害者の自立のかたち

名古屋市 特定非営利活動法人 花と緑と健康のまちづくりフォーラム

Interview Vol.6

CASE5  
NPO・団体等による農福連携



事例動画はこちら | <https://youtu.be/nvfvrzDJxRY>



Interviewee

田村 亨さん

特定非営利活動法人 花と緑と健康のまちづくりフォーラム 理事/事務局長

松野 裕一さん

社会福祉法人名古屋ライトハウス 光和寮 主任職業指導員

(特非)花と緑と健康のまちづくりフォーラムは、植物と接し、栽培する楽しみや喜びを共有する「園芸福祉」の一環として、農福連携を推進しています。障害者が自立し、幸せに暮らしていけるよう、障害者に寄り添い、共に歩んでいます。

## 愛知県で園芸福祉の活動と普及を図るNPO法人

(特非)花と緑と健康のまちづくりフォーラム(以下、フォーラム)は、名古屋市の代表的な都市公園である鶴舞公園や東山公園の花壇の管理や手入れを障害者と協力して行っています。花壇は、管理が丁寧に行き届き、色とりどりの花々が行き交う人を見惚れさせています。

フォーラムの活動の幅は広く、名古屋市港区にある自然庭園「名古屋港ワイルドフラワーガーデン ブルーボネット」(以下、ブルーボネット)を管理するほか、園芸福祉を地域に根付かせる「園芸福祉士」の養成講座の開催、障害者の就労支援など、様々な園芸福祉活動に取り組んでいます。

フォーラムの理事・事務局長を務める田村亨さんは、複数の福祉事業所と連携して活動し、農作業の指導なども行っています。障害者就労施設「社会福祉法人名古屋ライトハウス 光和寮」は、フォーラムとともに、公園の花壇の手入れや、ブルーボネットの清掃を担当してきました。2020年からは、田村さんの指導を受けながら、本格的に露地野菜の生産を開始しました。

名古屋ライトハウス光和寮の主任職業指導員 松野裕一さんは、障害者たちの作業を見守り、一緒に作業をするなかで、障害者が農業に関わることの魅力や効果を実感しています。「都市部に住む利用者さん(障害者)が多いことや、普段の作業も室内が多いため、自然と触れ合うことで気分転換になっているようです。また、作物を育てている責任感から『また行かないと』と、積極性が高まり、



自発的に作業に取り組む姿勢も見られるようになりました。自分たちが育てたサツマイモを収穫したときは、本当に嬉しそうでした」



## 障害者の子どもを持つ親の不安から、園芸による自立支援を考えるように

2007年のフォーラム創設当初は、「だれもが花との触れ合いを楽しめるように」と、花壇の手入れを中心とした園芸福祉活動を行っていました。田村さんが農福連携を始めたきっかけは、障害者の保護者から「子どもが就職できずに悩んでいる」という声を多く耳にしたことでした。

「保護者のみなさんは『自分たちがいなくなったあと、子どもたちはどうやって生活していけばいいのか』と心配されていました。それまでは、『花を育て、愛でる喜びを体験してもらえたら』という思いで活動していましたが、保護者の声を聞いてから、『障害者さんの将来の暮らしを支えるために何かできないか』と彼らの仕事につながることを考え始めました。当時は、「農福連携」という言葉もなく手探り状態でしたが、公園や畑での農作業体験などの取り組みから少しずつ活動の幅を広げていきました」

## 園芸福祉士のサポートにより、障害者とのコミュニケーションが円滑に

農福連携の普及に向けて大きな一歩となったのは、2011・2012年度に県の委託を受けて実施した「農業分野における障害者雇用実証事業」です。園芸福祉士を複数の農家へ派遣し、障害者の就労を支援するほか、障害者の雇用に関する課題を発見して、雇用促進の提案を行いました。この事業で園芸福祉士を派遣した花き生産農家の「(有)H&Lプランテーション(代表 鶴飼敏之氏)」では、この取り組みがきっかけとなり、地域の福祉事業所から障害者を1名雇用したり、数名を研修生として受け入れたりしています。障害者には他の従業員と一緒に、苗ポットへの肥料置き、ポットの土入れ、並べ替えなど幅広い農作業を任せています。

障害者の雇用を始めたばかりの頃には、園芸福祉士が農家と障害者の間に入ることで、コミュニケーションを問題なく行うことができ、安定的な作業が実現。人手不足が解消され、作業効率が1.5倍ほどアップしました。

花き農家の鶴飼敏之さんは、「園芸福祉士の指導を見て、周りのスタッフもコミュニケーションのコツを学び、積極的に障害者さんと話すようになった」と、支援の心強さを実感。同時に、園芸福祉士の可能性に魅了され、自らもその資格を取得しました。

## 園芸って楽しいんだ 障害者が自立するための農福連携

農業のなかでも、「障害者が無理なく働きやすい」と言われる園芸。その理由は「単純な手作業が多いから」だけではありません。園芸福祉士としての顔も持つ田村さんは、園芸から始める農福連携の良さをこう語ります。

「花は五感で触れ合えるので、障害の種類に関わらず、だれもが楽しめるものだと思います。種まきから開花までの栽培周期が短く、頑張った成果が早く現れるため、障害者さんのモチベーションにつながりやすいと感じています」

園芸作業を体験することで、心身ともに良い影響が現れる人が多くいます。

「普段は車椅子生活をおくっている方が、花の手入れが楽しくて夢中になるあまり、知らないうちに立ち上がって作業をしていたということもあります」

田村さんは、「障害者さんが、園芸作業の得意なことや好きなことから始めて、将来的に農業が仕事となり、自立するための農福連携を広めていきたい」と語ります。



障害者が手入れしている花壇



## まずは体験から始めてみませんか! 障害者と接すれば農福連携のハードルも下がる

障害者を受け入れている農家も増え、農福連携の理解は広がりつつありますが、推進する上での課題も見えてきました。

「障害の種類の違いや一人ひとりの症状の違いによって、どのような作業を任せるのが良いのか、どのように指導(コミュニケーション)すれば良いのか不安に感じている農家さんは多いです。障害者さんの立場になって考えないと、『頼んだ作業が上手くできていない』という結果になりかねませんので、分かりやすく伝える工夫が必要です。例えば、『40cm』という数字をそのまま伝えるのではなく、ものさしを見せながら説明したり、長さを視覚的にイメージできる道具を作成す



ることも必要です。慣れるまで時間がかかる場合もありますが、障害者さんと真摯に向き合う重要性を伝えながら、農福連携を進めていく必要があると感じています」

「興味はあるが、何から始めればいいのか分からない」と感じている農家や福祉事業所が多いのも事実。

「取り組む前からあれこれ悩みより、まずは簡単な農作業体験から始めてみるのが、良いでしょう。障害者さんと接してみれば、案外問題がないことに気づくはず。農福連携を進める上で不安があれば、気軽に相談してください。みなさんの課題に応じて、柔軟にサポートします」 “農福連携の良き相談者”になれるよう、田村さんの挑戦は続きます。

特定非営利活動法人 花と緑と健康のまちづくりフォーラム 名古屋市  
<http://www.hana-midori-kenko.org/>

園芸福祉を始めた年	2005年に準備会を設立し活動開始
どういった方と取り組みを行っているか	高齢者、障害者や子どもを含むすべての人々
園芸福祉の取り組み内容	食育、花育、生涯学習等の教育、福祉ガーデン、福祉農園づくり、園芸福祉士養成講座、ボランティア養成講座、各種講演会の開催

社会福祉法人名古屋ライトハウス 光和寮 名古屋市 <https://nagoya-lighthouse.jp/kowa/>

展開事業	就労移行支援事業、就労定着支援事業
事業内容	障害者の方の就職支援、就職後支援
どういった障害の人が多いか	発達障害、知的障害
農福連携の作業内容	テーブルガーデン(花壇づくり、維持管理)、里山エリア(野菜苗植え、維持管理)
作業頻度	週2~3回

## 農福連携を実践してみよう

この農作業マニュアルは、施設外就労など農福連携に取り組もうとする際の参考とするためのものです。なお、記載の農作業方法は、障害の種類や雇用の形態を問わず、標準的な作業方法としています。実際に現場で作業を行う場合は、その農家・農業法人のやり方に従ってください。



## 作業の切り出し・作業手順マニュアル

障害の種類や個人の性質によって、得意な作業、不得意な作業があり、一連の作業を任せることが難しいこともあります。そんな時は、一連の作業を一つ一つの単純な作業に分解して、「作業の切り出し」を行います。作業の切り出しを行うことで、その人に合った作業が見つかることがあります。

また、障害者には視覚的な説明が有効なので、品目や作業ごとの作業手順を説明する場合は、障害者向けの作業手順マニュアル(作業ガイドとも言います)を作成することが大切です。作業の手順を説明するだけでなく、注意する点や不良品の見分け方なども写真で分かりやすく示します。



## 農作業全体の改善

農福連携のために作業方法を改善したところ、全体として効率が上がった事例も多くあります。「誰がやっても同じ結果になる」ことを目指し、農家、福祉事業所が協力して農作業の改善ができないか検討してみましょう。



### 作業の見直し

慣行的に行っている作業について、従来のやり方を見直してみることも必要です。たとえば今まで3列まとめて行っていた水やりを1列ずつにすることで、むらがなくなり初心者でもやりやすくなります。このように、作業を整理し見直すことで障害者だけでなく健常者もやりやすくなる場合があります。

### 作業道具の改善・機械の使用

判断が容易になるように道具の改良も検討します。例として、「はかりに基準となる重さの目印を表示」、「色味の判断基準となるカラーチャートや写真を用意」、「長さの基準となる道具の作成」などが挙げられます。また、必要であれば作業や判断を助ける機械の導入も検討します。例として、音声でサイズを判別してくれる機能を持ったはかりを活用すれば、誰でも容易に選別を行うことができます。

### 環境の整備・安全対策

道具の定位置を定めて表示したり、ゴミ箱にラベリングして分別が一目で分かるようにしたり、通路に番号を表示したりするなど、はじめて来た人でも混乱しない環境づくりが大切です。

また、ホースや配線でつまずく可能性のある場所はないかなど、安全性の観点でも問題がないか確認します。

農作業事故は本人の不注意だけでなく、作業場所や使用する道具や機械、周囲の環境を整えることで防げるものもあります。多方面から安全対策を行きましょう。



## 農作業マニュアルの各品目の生産状況

この農作業マニュアルに掲載の各品目は、愛知県で多く生産されている野菜と花きの品目です。次ページからは、実際にこれらの農作物において作業を行う際の手順を掲載しています。

<p><b>キャベツ</b></p>	<p>愛知県のキャベツ生産の歴史は、全国で最も古く、明治中期に名古屋近郊で始まりました。その後、豊川用水の通水を契機として、東三河地域でも生産されるようになり、全国有数の大産地となっています。現在では箱での出荷以外に、大型コンテナによる契約出荷も行われています。</p>	<p>産出額 246億円 産出額の全国順位(シェア) 1位 作付面積 5,340ha 主な生産地 田原市/豊橋市</p>
<p><b>ブロッコリー</b></p>	<p>愛知県のブロッコリー栽培は、東三河地域で盛んに行われ、全国有数の産地となっています。また、ブロッコリーはカリフラワー同様、キャベツの変種で、小さなつぼみの固まりと茎を食べるため、花野菜とも呼ばれています。栄養価、調理の簡単さから消費は伸びています。</p>	<p>産出額 38億円 産出額の全国順位(シェア) 5位 作付面積 940ha 主な生産地 田原市/豊橋市</p>
<p><b>トマト</b></p>	<p>愛知県のトマト生産は、後にカゴメを創設した蟹江一太郎氏が1899年に栽培を開始したと言われています。大玉、ミディ、ミニ、カラー等様々な種類が栽培されています。中でも、先端がとがった形をした「ファーストトマト」は、愛知県の特産品として根強い人気があります。また、奥三河では、授粉が不要な「あいさか2号(商品名:ルネッサンス)」が栽培されています。</p>	<p>産出額 155億円 産出額の全国順位(シェア) 3位 作付面積 507ha 主な生産地 田原市/豊橋市/豊川市 (加工・ミニトマト含む)</p>
<p><b>ミニトマト</b></p>	<p>愛知県では東三河地域を中心としてミニトマト栽培が行われています。大玉トマトに比べ比較的新しい品目で、品種や作型を工夫しほぼ周年安定供給を実現しています。一般的なミニトマトの他に、フルーツ、カラーなどバラエティに富んだ品種・ブランドが栽培されています。</p>	<p>収穫量 13,900t 収穫量の全国順位(シェア) 3位 作付面積 143ha 主な生産地 田原市/豊橋市/豊川市</p>
<p><b>キュウリ</b></p>	<p>愛知県のキュウリ生産は、西三河地域を中心に温暖な気候条件を活かし昭和初期より栽培が始まりました。9月に播種し、翌年6月まで収穫する長期栽培で、厳寒期から春先にかけて安定的な出荷が行われています。近年では歯切れがよく、光沢のある品種を導入するなど高品質なキュウリの生産に取り組んでいます。</p>	<p>産出額 28億円 産出額の全国順位(シェア) 17位 作付面積 156ha 主な生産地 安城市/西尾市/碧南市</p>
<p><b>バラ</b></p>	<p>愛知県のバラ生産は、東三河地域を中心に全国一の産出額を誇っています。多くの品種が育成され、様々な花色や、「スプレー」と呼ばれる一つの枝にたくさんの花を咲かせるものなどが出荷しています。贈り物やプライダル用として人気のあるバラですが、特徴のある品種の登場によりいろいろな場面で使われるようになりました。</p>	<p>産出額 23億円 産出額の全国順位(シェア) 1位 作付面積 49ha 主な生産地 豊川市/田原市/西尾市/豊橋市</p>
<p><b>カーネーション</b></p>	<p>毎年5月第2日曜日の母の日に向けて、生産のピークを迎えるカーネーションは品種が非常に多く、赤色や白色の一輪咲きを始め、様々な花色や「スプレー」と呼ばれる咲き方のカーネーションなどが花屋に並びます。愛知県は、長野県に次ぐカーネーションの産地です。</p>	<p>産出額 17億円 産出額の全国順位(シェア) 2位 作付面積 47ha 主な生産地 西尾市/田原市/碧南市</p>
<p><b>花苗</b></p>	<p>花壇用としてガーデニングブームを背景に生産が増え、愛知県は全国有数の産出額を誇っています。一年を通じて、非常に多くの種類が出回りまます。特に春は、サルビア、ペチュニア、マリーゴールドなど、苗の種類も豊富です。</p>	<p>産出額 19億円 産出額の全国順位(シェア) 2位 作付面積 100ha 主な生産地 一宮市/春日井市/稲沢市/愛西市/碧南市</p>

平成30年産農産所得統計および平成30年産野菜生産出荷統計(ミニトマト)より

# vol.1

収穫

箱詰め

# キャベツ

キャベツの収穫および箱詰めをします。サイズの判断や切り方が難しいため、作業者の特性などによって作業実施を判断します。



準備すること/道具

収穫 作業用手袋、包丁、コンテナ

箱詰め 出荷用段ボール

動画でより詳しく!



## > 収穫



作業用手袋をして包丁をもち、収穫するキャベツを選びます。手を広げたサイズのもものが収穫時期となります。

### POINT

包丁の刃が自分や他の人、キャベツに当たらないよう取り扱いに注意します。



外葉を2枚の残して、不要な外葉を押さえながらキャベツを傾けます。



葉をどかしたら根元から包丁で一気にかち切ります。

### POINT

根元以外に傷をつけないように気を付けましょう。一度に切れなかった場合は余分な葉を取り除き、飛び出た茎を切り落とします。



コンテナに丁寧にに入れていきます。

### POINT

キャベツに傷がつかないように丁寧に入れましょう。

## > 箱詰め



段ボールを組み立てて箱詰めしていきます。葉脈が上になるように揃えて段ボールに箱詰めしていきます。

### POINT

箱詰めするときはキャベツの葉脈のラインが同じ角度になるように詰めていきましょう。



箱を閉じて終了です。

※用途によって出荷方法が変わるため、カゴに詰めて出荷場へ運んだり、調理用のものは大きな鉄コンテナに入れるなど、サイズの選別が不要な場合があります。

# vol.2

収穫

調整

箱詰め

# ブロッコリー

ブロッコリーの収穫および箱詰めをします。サイズの判断や切り方が難しいため、作業者の特性などによって作業実施を判断します。



準備すること/道具

収穫 作業用手袋、包丁、コンテナ

調整・箱詰め 調整用まな板、包丁、出荷用段ボール

動画でより詳しく!



## > 収穫



作業用手袋をして包丁をもち、収穫するブロッコリーを選びます。拳より大きいものが収穫時期となります。

### POINT

包丁の刃が自分や他の人、ブロッコリーに当たらないよう取り扱いに注意します。



ブロッコリーの頭を押さえて斜めにします。手のひらよりも少し長めに切ります。

### POINT

この後の調整作業で長さを揃えるため、茎を長めにとり収穫する。



包丁を定めた場所に当て一気に力を入れて切っていきます。不要な葉を切り落とします。その後ブロッコリーを傷つけないようにコンテナに入れていきます。

### POINT

切り除く葉は出荷基準に応じて調整してください。ブロッコリーを傷つけないように注意して切りましょう。

## > 調整・箱詰め



段ボールに保護フィルムを被せます。

### POINT

フィルムの有無は出荷方法によります。



調整用まな板と包丁を準備し、ブロッコリーを乗せ、ガイドに沿ってカットします。

### POINT

まな板の背にブロッコリーの頭をあて、長さが均一になるように切ります。まっすぐ切るようにしましょう。



段ボールにブロッコリーを詰めて完了です。

### POINT

並べ方の基準を必ず確認しましょう。

# vol.3

収穫

ホルモン処理

# トマト

トマトの収穫およびホルモン処理をします。



準備すること/道具

- 収穫** 収穫ハサミ、コンテナ
- ホルモン処理** 植物成長調整剤(スプレー)、手袋



## > 収穫

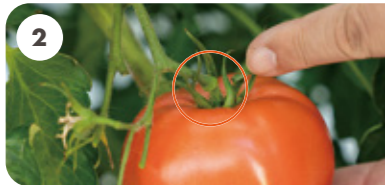


1

収穫用コンテナをそばに置き、収穫時期に達したトマトを選びます。

### POINT

季節によって収穫時期に達したトマトの色が変わります。カラーチャートや写真などを準備し見比べられる環境を作りましょう。



2

離層(実の少し上のふくっと膨らんだ部分)の出っ張っている部分に親指を当てて押します。

### POINT

離層は軽く折れるので無理に取るうとしないようにします。ハサミを使ってもよいでしょう。



3

残ったヘタは収穫ハサミで切り取ります。

### POINT

根元を切ることで他のトマトを傷つけることを防ぎます。



4

ヘタを下向きにしてコンテナに丁寧に置いていきます。

### POINT

果実がつぶれないように平積みするとよいでしょう。

## > ホルモン処理



1

処理適期の花を見つけます。

### POINT

花弁が反り返って色が濃い花です。



2

人差し指と中指で挟み、植物成長調整剤(スプレー)を一度に1~2回十分にかかるように吹きかけます。

### POINT

スプレーは、1つの花につき一度だけかけるようにします。翌日以降に再度かけないようにしましょう。

# vol.4

収穫

ホルモン処理

# ミニトマト

ミニトマトの収穫およびホルモン処理をします。



準備すること/道具

- 収穫** 収穫用カゴ
- ホルモン処理** 植物成長調整剤(スプレー)、手袋



## > 収穫



1

収穫用のカゴを肩にかけ、収穫するミニトマトを選びます。

### POINT

季節によって収穫時期に達したミニトマトの色が変わります。カラーチャートや写真などを準備し見比べられる環境を作りましょう。



2

離層(実の少し上のふくっと膨らんだ部分)の出っ張っている部分に親指を当てて押します。

### POINT

離層は軽く折れるので無理に取るうとしないようにします。ハサミを使ってもよいでしょう。



3

収穫したミニトマトはカゴに入れています。カゴが3分の1ほどたまったら大きなカゴに移します。

## > ホルモン処理



1

処理適期の花を見つけます。

### POINT

花弁が反り返って色が濃い花です。



2

人差し指と中指で挟み、植物成長調整剤(スプレー)を一度に1~2回十分にかかるように吹きかけます。

### POINT

スプレーは、1つの花につき一度だけかけるようにします。翌日以降に再度かけないようにしましょう。

キュウリの収穫およびひげづる処理をします。



準備すること/道具

- 収穫** 収穫ハサミ、収穫用カゴ、手袋、収穫用コンテナ
- ひげづる処理** 収穫用かご、手袋

動画でより詳しく!



＞ 収穫



1 利き手にハサミを持ち、収穫するキュウリを選びます。18~20cm程度の長さのものが収穫対象です。

**POINT** 選定の目安として、収穫ハサミの長さ以上のものを収穫します。



2 トゲを折らないように注意して持ち、つるを切ります。

**POINT** キュウリは表面のトゲがあるほうが鮮度が良いとされるので、極力触れすぎないようにしましょう。



3 実の先に花がある場合は花をとります。

**POINT** 取った花は地面に捨てても構いません。



4 収穫したキュウリは収穫用カゴに丁寧にに入れていきます。



5 小さいカゴに3分の1程度溜まったら、収穫用コンテナに移します。

**POINT** 移す時は1本1本丁寧に並べましょう。収穫したキュウリは調整の時に規格に合わせて選別していきます。

＞ ひげづる処理



1 ひげづるを根元から2~3cmの場所でつまみ、ちぎりとります。

**POINT** つるは伸びると巻きついて作業の邪魔になるのでなるべく早めに取り除きましょう。つるはカゴに入れてまとめて捨てます。

バラの収穫やトゲとりなどの調整、栽培に関わる摘蕾などを行います。非常に繊細な作業となるので、作業者の特性によって作業実施を判断します。



準備すること/道具

- 収穫** 革手袋、収穫ハサミ、収穫ネット、長袖長ズボンの服装(トゲがあるため)
- 調整・出荷** 革手袋、収穫ハサミ、輪ゴム、水を張ったバケツ
- 摘蕾** 革手袋、収穫用カゴ

動画でより詳しく!



＞ 収穫・調整



1 収穫する花を選びます。

**POINT** 咲き具合の判断は難しいので、写真を用意するなどして見比べられるような環境を整えましょう。



2 手袋をしている方の手で茎を握り、株元から切ります。

**POINT** トゲが刺さらないように注意します。



3 収穫ネットの上に置きます。ネットいっぱいまで収穫したら、まとめて出荷場まで運びます。

**POINT** 花びらが傷つかないように丁寧に置きます。



4 バラを調整台に乗せたら茎の中心を持ち、手袋をした方の手で下から15cmほどの葉とトゲを取り除きます。品種ごとに分けて水を張ったバケツに入れます。

**POINT** 取り残したトゲも丁寧に取り除きます。

＞ 出荷



1 バケツに入っているバラを作業台に乗せず。作業台の目盛りを基準にして同じ長さのバラを選び、10本を1束にします。

**POINT** バラに病気や虫の害がないか確認しましょう。



2 輪ゴムを2本の茎に通して捻り、バラを束ねたら切り口を切り揃え、品種ごとに分けて水を張ったバケツに入れ出荷をします。

＞ 摘蕾



1 葉を取らないように注意して小さな蕾を折り取ります。

**POINT** 取った脇芽はカゴの中に入れて後で捨てにいきます。

カーネーションの収穫や下葉とりなどの調整、出荷作業をします。非常に繊細な作業となるので、作業者の特性によって作業実施を判断します。



準備すること/道具

**収穫** 収穫ハサミ、収穫ネット

**調整・出荷** 収穫ハサミ、輪ゴム、水を張ったバケツ



動画でより詳しく!



＞ 収穫



1

利き手にハサミを持ち、収穫する花を選びます。スプレー品種では、2つ以上の花のうち、花びらが平行よりも広がっているものが収穫時期の花になります。

**POINT**

2つ以上の花弁が平行よりも開いていないものは収穫しないように気を付けましょう。



2

利き手でない方で茎を押さえて、1番下のネットから5cmほど上の位置で切ります。

**POINT**

収穫時期により切る場所が異なります。10月～3月は1番下のネットから5cmほど上で切り、4月以降は地際で切るようにします。



3

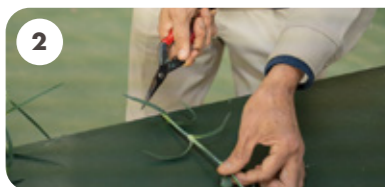
茎や葉が折れないように注意しながらネットから引き抜きます。花弁が傷つかないように収穫ネットに置き、数がまとまったら出荷場まで運びます。

＞ 調整・出荷



1

品種ごとに作業台に並べます。揃える長さは茎の太さによって変わります。



2

作業台の目盛りを目安に長さを揃えます。茎を切ったら下葉を取ります。



3

10本を1束にします。輪ゴムを2本の茎に通して捻り、束ねます。

**POINT**

折れやすいので注意してください。



4

品種ごとに分けて水を張ったバケツに入れます。

花苗に肥料を与える施肥(せひ)と、育った苗を大きな鉢に移し替える鉢上げを行います。



準備すること/道具

**施肥** 苗、化成肥料、薄手の手袋

**鉢上げ** 湿らせた培養土、3号苗、4.5号鉢、薄手の手袋



動画でより詳しく!



＞ 施肥

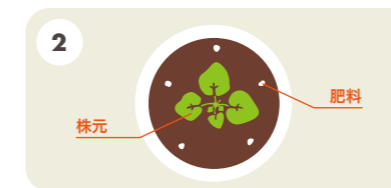


1

葉を上げ、株と鉢の中心より少し鉢側に化成肥料を埋め込みます。

**POINT**

化成肥料が土に完全に埋まるくらいに埋め込みます。



2

5個の肥料を等間隔に埋めていきます。

**POINT**

株に近すぎても根を傷め、鉢に近づけても化成肥料の成分が流れ出やすいので、化成肥料を埋める位置に注意します。

＞ 鉢上げ



1

鉢に培養土を半分くらい入れ、手で押さえて鉢の3分の1程度の分量にします。

**POINT**

底の部分は拳で軽く押さえ平らになるようにします。



2

片手で鉢を持ち、もう片方の手で花の茎を優しくつかんでひっくり返し、苗を取り出します。

**POINT**

苗を取り出すときは土を崩さないように注意します。



3

株元の黄色くなった葉や枯れた葉を取り除きます。



4

苗が鉢の中心にくるように置きます。

**POINT**

株元が鉢の2cmほど低くなるようにします。



5

苗と鉢の隙間に培養土を入れて、指先で土を押し込み、できた隙間にもう一度培養土を入れてしっかりと押し込みます。

**POINT**

鉢の縁から2cmほど土が低くなるようにして、ウォータースペースを作ります。

# Know 農福 Love

農福連携事例集・農作業マニュアル

*Noubuku  
Aichi*

愛知県農業水産局農政部農業経営課

<https://www.pref.aichi.jp/nogyo-keiei/>

TEL **052-954-6409** (ダイヤルイン)

